

洗足の連結住棟

正会員 北 山 恒 君

正会員 金 田 勝 徳 君

周辺の密度感を受け止めたヴォリュームの連なりにより、対比的素材でありながら閑静な住宅街にとけ込んだ佇まいを見せる集合住宅である。街路から、住棟間のピロティに設けられたゲートをくぐると、孟宗竹が植えられた心地よいスケールの中庭に至る。この中庭には、各住戸へのアプローチがとられており、縦動線は中庭に開放された昇降部と住棟の隙間に挿入された玄関周りの対照が示すように、開かれながらも守られた場所となっている。過半の住戸は住棟をまたいで設定されており、視覚的な分節と実際の居住単位の分節がわざとずらされているが、これは、自らの住戸を客体視するとともに他者の住まいも同等に視野に入るといった、コモンに対する無意識を醸成する通奏低音とも読み取れる。もちろん、視線は明快にコントロールされるなど一般的対応はなされているのだが、単なる閉鎖を越えた高次のレベルで、プライバシーを担保しようとする設計者の思慮の射程には驚かされる。

こうした空間の分節と統合は、各ブロックの構造壁を相互に90°の角度で振り、これを剛な床スラブで連結して、各方向の水平力に抵抗しかつ全体のバランスをとる巧妙な構造によって実現されている。一見アクロバティックに見えるが、常識的スラブ厚と壁厚の範囲内で納められるなど、解法には無理がない。複層ガラスが採用されてはいるものの住戸外周が全面サッシであるなど、温熱環境に対する配慮では気になるところもあるが、縁側のように周囲に設けられたバッファゾーン、丁寧に考えられた可動間仕切り、内部的にも活用可能な連結バルコニーなど、何層もの対応がそれなりになされている。

資産運用の一環として建てられた民間建築で、純粹に経済原理のなかで産み落とされたものでありながら、大胆なスキーマと丹念な構造そして丁寧なディテールによって、都市空間を切り売りする感のある昨今の住宅ビジネスに対する、知性あふれた異議申し立てとなっている。

現代日本の都市問題は、土地の高度利用、空間としての魅力、災害に対する堅牢性、経済原理への適合性といった相互に並立困難な4つの課題に対応するスキーマを、わが国の集合住宅の空間構成が未だに持ち得てないこととも関係しているのだが、ひとつだけでも成立させることが困難で、かつ互いに相反することもあるこれらを、思慮深く統合しようとした本作は、建築の未来に希望を抱かせるに十分な出来映えとなっている。通常破綻しがちなこうした大きな問題提起が、ある完成度を持って成立しているのは、この課題に長年取り組んできたこの設計者の努力によるものであり、本作品はそれら一連の思念が具体的に結実したものとして高く評価できる。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。